話し手と聞き手が共通認識を持っている場合、チャ形が使用され高校生などの若い世代でも、ある程度盛んにチャが使用されていることも示された。また、確認する場面ではべも使用され、こちらも若い世代でもある程度使用され続けているということができる。方言形として、チャ・べはまだ命脈を保っている形式だが、融合形のベッチャは上の世代の使用が多く、若い世代の使用は衰退した状況である。若年層や高校生の女性でも、チャは比較的使用されている。この点は、方言に対する意識に関する調査と合わせて考えていかなければならない。方言形のアクセサリー化と、本調査で出てきたような文末詞の使用がどの程度リンクするかは、今回は詳しく触れられなかった。

想起表現というテーマの中に、様々な状況を設定し、また基本的に会話という状況設定のため、聞き手と話し手の共通の事態を述べる例文を作成したことで、確認要求に関する発話と重なる点が多かった。また、同じ文であっても、方言形と共通語形を含め、様々な形式が回答された。

本調査は、状況設定をした上で自由に形式を回答してもらうというスタイルをとったが、ここで出てきた個別の形式について更に考察する必要がある。これまでの研究は、べ、チャなど方言形の成果が先行していたが、ヨネ、ヨナといった共通語形に関し、当地をはじめ東北地方や各地方でどのような使用状況がみられるのかについては、まだあまり調査されていないと思われる。

形式ごとの調査は今後積み重ねる必要があるが、様々な形式が、年代差や性差、方言形と共通語形という要素を含めながら、共存して使用されているという実態が明らかになったのは、成果といえるのではないだろうか。その成果を活かしながら出てきた課題について１つ１つ詳しく調査し、文末表現の実態について、当地を含めた東北地方の状況を明らかにしなければならない。課題は多いが、継続した調査、考察をしていきたい。

参考文献

小林隆(2000)「文末形式「ケ」」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

佐藤亨(1982)「宮城県の方言」『講座方言学４　北海道・東北地方の方言』国書刊行会

佐藤信夫・佐々木健一・松尾大(2006)『レトリック事典』大修館書店

瀬戸賢一(2002)『日本語のレトリック－文章表現の技法－』岩波ジュニア新書

武田拓・半沢康(2003)「仙石線グロットグラム調査報告」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

玉懸元(1999)「仙台市方言の「べー」の用法」『言語科学論集』3

玉懸元(2001)「宮城県仙台市方言の終助詞「チャ」の用法」『国語学』52-2

野田春美(2002)「終助詞の機能」『新日本語文法選書４　モダリティ』くろしお出版

吉田雅昭(2004)「東北方言における文末表現形式「ケ」の用法」『国語学研究』43

吉田雅昭(2008a)「東北方言における基本的時間表現形式について－形式の変化と文法体系との相関－」『日本語の研究』4-2

吉田雅昭(2008b)「終助詞「ヨネ・ヨナ」の機能・意味について」『言語科学論集』12

伝統的方言語彙

作田　将三郎

1. はじめに

本報告では、昭和初期に行われた「小林好日博士東北方言通信調査資料」（以後、「第〇回小林資料」と略す）（注 1)、昭和中期高年層の言語を反映している『日本言語地図』などの方言調査結果、昭和初期以降の方言集類、2005・2006 年度に行った気仙沼市方言調査から、「唾」、および「雷」を意味する語形を取り上げる。そして、昭和初期以降の時間的側面、および世代別・男女別といった観点を考慮に入れた報告を行うことを目的とする。

2.「唾」

2. 1　先行研究の概観

まず、「唾」を意味する語形が気仙沼市や隣接する地域ではどのように分布しているのか確認するため、図 1 として『日本言語地図』第 3 巻 118 図の略図を示す。図 1 を見ると、宮城県北部地域にはシタキが分布しているが、国立国語研究所（1968）『日本言語地図』第 3 巻 118 図の原図で確認してみると、シタキとタンペの 2 語が多く分布している。また、岩手県南部から気仙沼市を含む宮城県北部にかけての地域について、原図である国立国語研究所（1968）を見てみると、ネッペ、タンパキ、スタンペといった語形も分布している。特に、シタキとタンペの接触地域として、両語形が混在していることを読み取ることができる。

ただ、気仙沼市を見てみると、シタキとネッペの 2 語が回答されている。この他の方言調査の先行研究として、気仙沼市は含まれてはいないが、登米郡東和町、桃生郡北上町、遠田郡涌谷町、栗原郡栗駒町、志田郡三本木町、玉造郡岩出山町などの県北部地域で調査を行った小林隆（1982）が

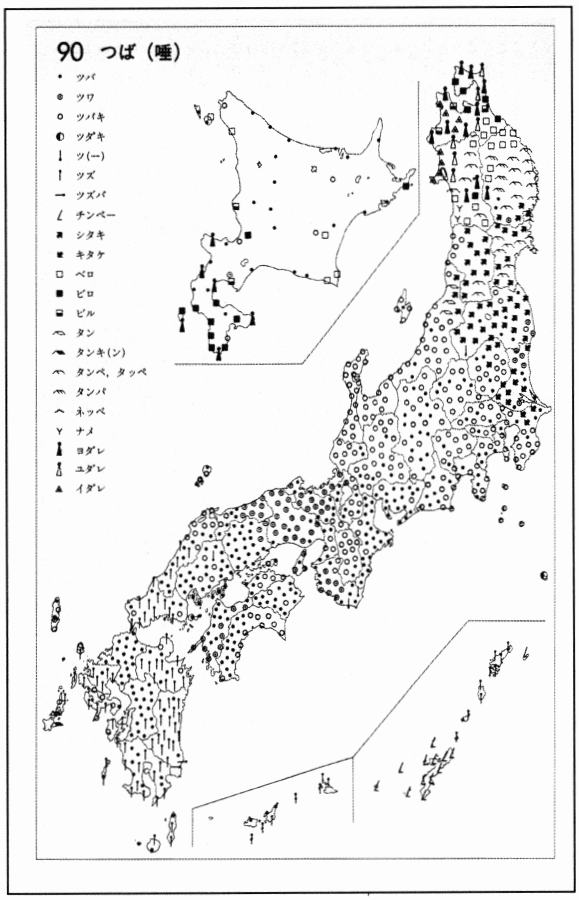

図 1　「唾」の方言分布図
（『日本方言大辞典』上巻より転載）

ある。小林（1982）によれば、これらの地域の昭和後期高年層では、タンペ、ネッペ、シタキ3語の使用が優勢であることを指摘している。

以上の先行研究から、県北部地域における昭和中期高年層、および昭和後期高年層では、「唾」を意味する語形として、シタキ、ネッペ、タンペ、タンパキが使用されていたことが窺える。

ところで、国立国語研究所（1968）において、宮城県北部にナッペという語形が1地点だけ見られるが、小林（1982）では報告されていない。この語形について、作田将三郎（2003）では、宮城県の中央部に位置する塩釜市において、昭和初期の言語資料である「小林資料」のうち塩釜市の調査票でナンペという語形が回答されていること、さらには、塩釜市の昭和後期高年層、および平成期高年層においてナッペが回答されていることを示している。ナッペという語形についてであるが、作田（2003）では、これらのことと仙台市・石巻市間グロットグラム調査の結果から、元々塩釜市に存在していたナンペと新たに石巻市から伝播してきたネッペが混交し、「ナンペ＋ネッペ→ナッペ」という語形を作り出したという推定を行った。ただし、ナッペの使用について、作田（2003）では、仙台市・石巻市間グロットグラム調査の結果から、塩釜市の10代から30代といった若い世代では使用されていないが、隣接する地域の若い世代で使用されていることを指摘している。

次節では、気仙沼市では「唾」を意味する語形として、どのようなことばが使用されているのかについて見ていくことにする。

2. 2　気仙沼市における「唾」を意味する語形

ここでは、気仙沼市における「唾」を意味する語形について、昭和初期以降の方言調査資料、方言集類といった文献資料、および2005・2006年度に行った気仙沼市方言調査の結果をまとめたものとして表1に示す。なお、表1で使用した資料は以下のものである。

＜文献資料＞

【昭和～平成】

・『本吉郡誌』（1949）本吉郡町村長会編、本吉郡町村長会、〈本吉郡誌編纂委員会編『本吉郡誌』1973、名著出版より再版〉

・『気仙沼町誌』（1953）気仙沼町誌編纂委員会、三陸印刷有限会社

・『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』（1992）菅原孝雄編、三陸新報社

＜方言調査＞

【昭和初期】

・「第1回小林好日博士東北通信調査資料」（1938）東北大学国語学研究室所蔵

【昭和中期】

・『日本言語地図』3（1968）国立国語研究所編、大蔵省印刷局（注2）

表1　気仙沼市の「唾」を意味する語形

年代	資料	被調査者	シタキ類	タンペ	ネッペ	ナッペ	タンパキ類	スタンペ	ツバ
1938	第1回小林好日博士東北方言通信調査資料	昭和初期	2/2	1/2 (理1)	2/2	0/2	0/2	0/2	0/2
1949	本吉郡誌		○						
1953	気仙沼町誌		○	○	○				
1959～65	日本言語地図	昭和中期高年層	1/2	0/2	1/2	0/2	0/2	0/2	0/2
1992	けせんぬま方言ア・ラ・カルト	平成期高年層		○	○		○		
2005	気仙沼市方言調査（面接調査）	平成期高年層	2/2	2/2	2/2 (理1)	0/2	1/2	1/2	0/2
		平成期若年層	0/2	1/2 (理1)	1/2 (理1)	0/2	0/2	1/2 (理1)	2/2
2006	気仙沼市方言調査（多人数面接調査）	平成期高年層	9/22 (理8)	8/22 (理9)	13/22 (理6)	2/22	7/22 (理8)	1/22 (理1)	15/22
		平成期中年層	3/15 (理5)	6/15 (理3)	3/15 (理7)	2/15 (理3)	2/15 (理2)	0/15 (理2)	9/15
		平成期若年層	0/13 (理2)	2/13 (理2)	2/13 (理2)	0/13 (理2)	0/13 (理1)	0/13 (理1)	13/13
		平成期少年層	0/20 (理7)	2/20 (理9)	0/20 (理1)	1/20	0/20 (理1)	0/20 (理1)	17/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「スタギ、シタギ」はシタキ類に、「タンパキ、タンパギ、タンパゲ、タンパツ、タンパジ」はタンパキ類に、それぞれ含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、（理　）＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

(3) なお、スタギ類、タンパキ類は、各類の語形のうち、どれか1語でも回答した人数である。

つぎに、文献資料から得られたすべての用例を以下に示す。

①シタキ類

(1) すたき＝唾　　[『本吉郡誌』]
(2) したき＝唾液。つばき。　　[『気仙沼町誌』]
②タンペ
(3) たんペ＝唾。　　[『気仙沼町誌』]
(4) たんペ（唾）　　[『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』]
③ネッペ
(5) ねつべ＝唾。つばき。　　[『気仙沼町誌』]
(6) ねっペ（唾）　　[『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』]
④タンパキ類
(7) たんぱぎ（唾液、つば）　　[『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』]

まず、昭和初期の「第1回小林資料」を見ると、気仙沼市においてシタキ類、タンペ、ネッペが回答されているが、このうちタンペは理解語化していたようである。その後、昭和初期から平成期にかけての文献資料では、シタキ類、タンペ、ネッペ、さらに平成期高年層の言語を反映している資料においてタンパキ類の記述が見られる。

2. 3　気仙沼市方言調査

2. 3. 1　調査結果の概観

ここからは、2006年度に行った多人数面接調査から得られた結果を使用して、表1に示した語形の使用状況について見ていくことにする。

まず、シタキ類であるが、高年層では使用語回答者と理解語回答者がほぼ同じである。一方、中年層では理解語回答者の方がやや多いものの、使用者回答者も見られる。しかしながら、若年層、および少年層では使用語回答者がおらず、もはや理解語化となっている、あるいはそこからもっと進んで廃語化へと向かいつつあることが窺える。

つぎに、タンペであるが、高年層ではシタキ類と同様に、使用語回答者と理解語回答者がほぼ同じである。ただし、中年層では、調査人数の半分もいってはいないが、使用語回答者が理解語回答者を上回っている。若年層では、使用語回答者と理解語回答者の数は同じであるが、それぞれ2名ずつと少ない。それに対して、少年層では、調査人数の約半数がこの類の語形を理解しているという回答が得られた。ただ、この語形類については、他の方言語形と比べると、若年層や少年層でも使用語回答者がいるという特徴を持っている。したがって、現在のところ、方言語形の中では、理解語化から廃語へと進む速度が遅いということが言える。

ところで、シタキ類とタンペの理解語回答者数であるが、調査人数に違いはあるものの、若年層よりその下の世代である少年層において多いという傾向が見られる。

ネッペは、高年層の使用語回答者が多く、他の方言語形と比べると、高年層では最も使用されて

いる方言語形と言える。しかし、下の世代になると、中年層では理解語回答者が使用語回答者を上回り、若年層では使用語回答者と理解語回答者の数が共に少なくなっている。また、少年層になると使用語回答者がおらず、しかも理解語回答者が1人しかいない。このことから、ネッペは高年層において使用語として扱われているが、中年層では理解語として扱われていることが窺える。一方、若年層では使用語、および理解語としてもあまり認識されておらず、少年層ではネッペという語形すら知らないようである。したがって、シタキ類・タンペと比べると、若い世代、特に少年層において理解語化を経ずに、廃語となっていることが見て取れる。

また、ナッペは若年層を除き、少数ながら使用語回答者がいる。また、理解語回答者も少ないながら、中年層・若年層に見られる。ところで、この語形は、県中央部の位置する塩釜市近辺の若い世代で使用されていることは前節で述べたが、今回の調査結果から、県北部地域の若い世代にはあまり浸透していないことが窺える。

タンパキ類であるが、使用語回答者は高年層と中年層に留まっている。一方、理解語回答者は各世代にいるものの、高年層以外は少ない。したがって、この語形は、高年層において使用語から理解語化へと移行している状態にあり、中年層以下では理解語化を経ずに既に廃語と化しているというのが現状であろう。

スタンペについては、使用語回答者が高年層の1人だけで、他の世代で皆無である。また、理解語回答者は各世代いるものの人数が少ない。したがって、ほとんど廃語となっていると解釈してよいものと思われる。ところで、このスタンペは、「シタキ類＋タンペ」が想定される語形であるが、国立国語研究所（1968）で概観すると、県北部地域では登米郡登米町に見られ、また岩手県南部にも分布している（注 3）。したがって、かつては県北部地域でも使用されていたことを窺わせるが、小林（1982）では、『日本言語地図』とほぼ同地点である登米郡登米町の昭和後期高年層においてスタンペが回答されていない。また、今回の調査結果では、平成期高年層の使用語回答者がほとんど皆無であること、などを考え合わせれば、少なくとも昭和後期以降、廃語へと進みつつあったものが、平成期になりほぼ廃語となったと解釈することができる。

最後に、共通語形のツバであるが、各世代において、方言語形よりも多く使用語として回答されている。

2. 3. 2　世代別、および男女別の観点から

ここでは、2006年度の多人数面接調査から得られた使用語・理解語の内訳を、世代別、および男女別という観点からに見ていくことにする。そこで、表2として、回答語形を使用語と理解語に分け、世代別、および男女別の回答者数をそれぞれ分けたものを示す。なお、世代ごとに得られた回答語形について、男女における使用語回答者と理解語回答者の数を比較したうえで、数が多い方には太字の数字を示した。また、使用語回答者と理解語回答者とが同数の場合には、便宜的に両者を太字で示したが、どちらも回答者が0人の場合には太字を付さなかった。ここでは、数の面から考察するため、太字の数字に着目して表を見ていただきたい。

表2　世代別・男女別に見た「唾」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		シタキ類		タンペ		スタンペ		ネッペ		ナッペ		タンパキ類		ツバ	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	**5**	3	5	**6**	**1**	**1**	**8**	3	**1**	0	**5**	4	**9**	0
22	女 10	4	**5**	**3**	**3**	0	0	**5**	3	**1**	0	2	**4**	**6**	0
中	男 7	**2**	**2**	**3**	1	0	0	**2**	**2**	1	**2**	0	**1**	**4**	0
15	女 8	1	**3**	**3**	2	0	**2**	1	**5**	**1**	**1**	**2**	1	**5**	0
若	男 5	0	0	**1**	**1**	0	**1**	**2**	1	0	0	0	0	**5**	0
13	女 8	0	**2**	**1**	**1**	0	0	0	**1**	0	**2**	0	**1**	**8**	0
少	男 10	0	**4**	0	**6**	0	**1**	0	**1**	**1**	0	0	0	**9**	0
20	女 10	0	**3**	2	**3**	0	0	**1**	0	0	0	0	**1**	**8**	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

まず、シタキ類であるが、使用語回答者が高年層男性と中年層男性といった男性に多い。一方、理解語回答者が多いのは、高年層女性、中年層男性・女性、若年層女性、少年層男性・女性である。これらのことから、シタキ類は、男性でも特に高年層でしようされているものの、それ以外の世代、および世代を問わず女性では理解語化していることが窺える。

つぎに、タンペであるが、中年層の男女において使用語回答者が多いものの、高年層女性、若年層男性・女性では使用語回答者と理解語回答者とが同数である。また、高年層男性、および若年層女性ではやや理解語回答者が上回り、少年層男性では完全に理解語化している。したがって、使用語と理解語とが拮抗している状況であり、今後は先に見たスタキ類のように若い世代から理解語化していく可能性があることが窺える。

スタンペ類は、全体の回答者数が少なく、使用している人や理解している人がほとんどいない語形である。そのため、廃語になりつつある、あるいは廃語化しているといえそうである。

ネッペであるが、高年層男性・女性、中年層男性、若年層男性、少年層女性において使用語回答が多い。ただ、高年層では理解語回答者との差があるのに対し、それ以外では理解語回答者と均衡している。また、回答者数の数も高年層では多いが、それ以外では少数である。したがって、ネッペは主に高年層で使用されている語形といえる。一方、中年層女性においては理解語回答者が多いため、理解語化していると考えられる。さらに、若年層・少年層では回答者数自体が少ないことから、これらの世代では廃語になりつつある、あるいは廃語化していると思われる。

ナッペについては、スタンペに比べれば、使用している人や理解している人はいるものの、もはや廃語になりつつある、あるいは廃語化している、といっていいかもしれない。

タンパキであるが、高年層男性と中年層女性で使用語回答者が多い。しかしながら、理解語回答者数とほとんど差がない。一方、高年層女性、中年層男性、若年層女性、少年層女性では理解語回答者が多いものの、高年層層女性を除けば、少数である。したがって、高年層では、男性で使用語、および理解語、女性では理解語と認識されているが、その他の世代では男女差なく、理解語ではなく、廃語になりつつある、あるいは廃語化していると考えられる。

最後に共通語形のツバであるが、各世代の男女において使用語形回答者が最も多い。したがって、主として、気仙沼市では現在最も使用されている語形ということになる。

ところで、表を横軸で見た場合、特に方言語形において、使用語と理解語とどちらが多いのだろうか。例えば、高年層男性ならば、使用語回答者に太字が付された方言語形は、シタキ類・スタンペ・ネッペ・ナッペ・タンパキ類の「5」、理解語回答者に太字が付された方言語形は、タンペ・スタンペの「2」とそれぞれ数える。その結果、使用語回答者のほうが多い、というような方法で分類を行うと、つぎのようになる。なお、ツバに付してある太字は数に入れていない。

①使用語回答者に太字が付された方言語形のほうが多い・・・高年層男性

②使用語回答者と理解語回答者に太字が付された方言語形が同数、または理解語回答者に太字が付された方言語形のほうがやや多い・・・高年層女性、中年層男性・女性、若年層男性

③理解語回答者に太字が付された方言語形のほうが多い・・・若年層女性、少年層男性・女性

すなわち、①に分類された「高年層男性」は主に方言語形を使用している、②に分類された「高年層女性、中年層男性・女性、若年層男性」では、方言語形が使用語でもあり、理解語でもあるという状況、③に分類された「若年層女性、少年層男性・女性」は方言語形が理解語化、あるいは廃語化している状況にある、ということになる。また、高年層男性は方言語形を保持しているのに対し、世代が下がれるにつれ、使用語・理解語の拮抗状態から理解語化、さらには廃語化へと移行していくことが見て取れる。さらには、各世代の男性よりも女性のほうが、方言語形を使用しない傾向にあることも窺える。

2. 4　まとめ

以上のことから、気仙沼市における「唾」を意味する語形が現在どのような状況にあるのかについて、つぎのようにまとめることができる。

・スタンペ、ナッペ・・・各世代において、廃語になりつつある、あるいは廃語化している状況にある。

・タンパキ類・・・高年層では使用語でありながらも、徐々に理解語化しつつある。一方、中年層以下では理解語化ではなく、廃語になりつつある、あるいは廃語化している。

・シタキ類・・・高年層ではタンパキ類と同様に、使用語でありながらも、徐々に理解語化しつつある。一方、中年層と少年層では理解語化している。また、若年層では廃語になりつつあ

る、あるいは廃語化している。したがって、中年層以下の世代においては、スムーズに「理解語化→廃語」へと移行せず、世代によって複雑な変化が見られる。

・タンペ・・・高年層・中年層では使用語としてだけではなく、徐々に理解語化しつつある。一方、若年層では廃語になりつつある、あるいは廃語化している状況にある。ただし、少年層では、理解語化しており、特に若年層・少年層ではシタキ類と同様に「理解語化→廃語」へと移行せず、「理解語化」が踏みとどまっているような現象が起きている。

・ネッペ・・・高年層では使用語であるが、中年層では理解語化している。一方、若年層以下では廃語へと進みつつある、あるいは廃語化している。

・ツバ・・・各世代において最も多く使用されている。

3.「雷」

3. 1　「雷」を意味する方言分布図の概観

まず、「雷」を意味する語形が宮城県、および気仙沼市ではどのように分布しているのか確認する。そこで、図2として『日本言語地図』第6巻256図「雷」の略図を示す。図2から宮城県、および気仙沼市の分布状況を概観すると、気仙沼市を含む県全域にライサマ類が、岩手県との県境である北部の一部、および西部の海岸沿いの一部にカンダチ類が、福島県との県境である南部にライ類が、それぞれ分布している。また、国立国語研究所（1974a）『日本言語地図』第6巻256図「雷」の原図には、宮城県北西部、および中央部にゴロゴロサン類が分布しているが、幼児語との注記が見られる。

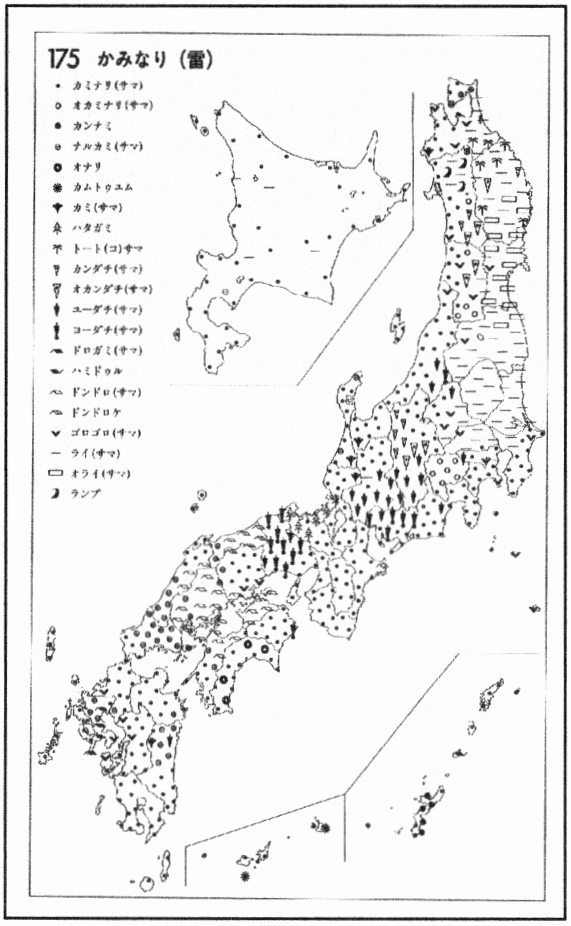

図2　「雷」の方言分布図
（『日本方言大辞典』下巻より転載）

ところで、作田将三郎（2005）では、宮城県における「雷」を意味する語について、「ナルカミ→カミナリ→カンダチ類→ライ類→ライサマ類」と変遷したこと、さらには、特に近世後期において作成された文献資料から得られた用例をもとに、近世後期における「雷」の方言分布図を作成し、現代方言の分布との比較した結果、近世以降、「カンダチ類→ライ類→ライサマ類」と推移したことを指摘した。したがって、『日本言語地図』に見られる現代方言の分布は、最も新しい語形であるラ

イサマ類が県全域に分布し、それより古い語形であるカンダチ類やライ類が周辺部に残存し分布していると解釈することができる。

3. 2　気仙沼市における「雷」を意味する語形

ここでは、表3として、近世後期以降の方言調査資料、文献資料、および2005・2006年度に行った気仙沼市方言調査結果をまとめたものを示す。なお、表3で使用した資料のうち、2. 2において挙げてないものだけを以下に記しておく。

＜文献資料＞

【近世】

・『天保凶作天候記録』、小山家蔵、村役人？、1835（天保6）、〈気仙沼市総務部市史編さん室編『気仙沼市史8資料編』1995、気仙沼市に所収〉

＜方言調査＞

【昭和初期】

・「第2回小林好日博士東北通信調査資料」（1939）東北大学国語学研究室所蔵

【昭和中期】

・『日本言語地図』6（1974a）国立国語研究所編、大蔵省印刷局

まず、近世後期の気仙沼市において、気仙沼市総務部市史編さん室編（1995）『気仙沼市史8資料編』に収録されている『天保凶作天候記録』を見てみると、ライ類が使用されている。なお、用例の後にある［　］には、書名、作成者、作成者の身分、記載年代などの情報を記しておいた。

（8）雷ハ一切発声ナシ　　［『天保凶作天候記録』小山家蔵、村役人？、天保6（1835）］

ところで、用例（8）に見られる「雷」の読み方であるが、作田（2006）において、岩手県・宮城県・福島県といった東北地方太平洋側地域における近世後期の地方語文献から得られた「雷」を意味する語形について、以下のようなことを指摘した。

①「カミナリ」は「かみなり、神鳴、神なり」などと表記されている用例が多い

②「雷」には「らい」と表記されている例や「雷（らい）、雷（ライ）」などのルビが付されている用例がある

③同一資料において、「神鳴（かみなり）」「雷鳴（らいなり）」といった使い分けが見られる例がある

④近世の仙台方言集である『浜荻』（1813頃）に、「らいがとけた　雷墜　かみなりがあまった」（注4）という方言的言い回しが記載されている

これらのことから「雷」の語形の読み方を「らい」と読むものと判断した。

さて、昭和初期の気仙沼市において「第2回小林資料」を見ると、オナリとライサマ類が回答されている。このうち、オナリであるが、先に見た国立国語研究所（1974a）の原図、および国立国語研究所（1974b）を参照すると、オナリに近い語形として、ナリが兵庫県（1地点）に、オナリが高知県（6地点）にそれぞれ分布している。しかし、高知県に分布しているオナリが遠く離れた

表 3　気仙沼市の「雷」を意味する語形

年代	資料	被調査者	カンダチ類	ライ	オナリ	ライサマ類	ゴロゴロサン類	カミナリ類
1835	天保凶作天候凶作	近世後期・庶民？		①				
1939	第 2 回小林好日博士東北方言通信調査資料	昭和初期	0/4	0/4	2/4	3/4	0/4	0/4
1959～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	0/2	0/2	2/2	0/2	0/2
1992	けせんぬま方言ア・ラ・カルト	平成期高年層				○		
2005	気仙沼市方言調査（面接調査）	平成期高年層	0/3	0/3	0/3	3/3	1/3	2/3
		平成期若年層	0/2	0/2	0/2	2/2	0/2（理 2）	2/2
2006	気仙沼市方言調査（多人数面接調査）	平成期高年層	0/22	0/22	0/22（理 2）	20/22（理 2）	11/22（理 4）	9/22
		平成期中年層	0/15（理 1）	0/15	0/15	11/15（理 4）	3/15（理 4）	6/15
		平成期若年層	0/13	0/13	0/13	2/13（理 4）	1/13（理 1）	11/13
		平成期少年層	0/20（理 1）	0/20	0/20	1/20（理 7）	4/20	19/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「カンダチ、オカダチ」はカンダチ類に、「オレサマ、オレーサマ、オリーサマ、オデサマ」はライサマ類に、「ゴロゴロサン、ゴロゴロサマ、ゴロゴロ」はゴロゴロサン類に、「カミナリ、カミナリサン、カミナリサマ」はカミナリ類に、それぞれ含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。
数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、（理　）＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○数字＝資料内の用例数、○＝使用

(3) なお、カンダチ類、オレサマ類、ゴロゴロサン類、カミナリ類は、各類の語形のうち、どれか 1 語でも回答した人数である。

気仙沼市に飛び火的に伝播してきたとは考えにくい。そこで、東北地方に目を向けると、ナラシが秋田県（2 地点）に、ナラサリが青森県（1 地点）に、オナリカミサンが岩手県盛岡市（1 地点）ではあるがそれぞれ回答されている。国立国語研究所（1974a）では、ナルカミという語形が中国・

四国・九州の一部と東北地方の青森・秋田県に分布している。ただ、宮城県には見られない。一方、カミナリという語形が東北地方で青森県・秋田県・山形県の日本海側に多く分布し、岩手県・福島県にも点在している。宮城県では県北部と中央部にそれぞれ1地点ずつ見られる。また、国立国語研究所（1974b）によると、全国的に「ナルカミ→カミナリ」という推定が示唆されており、宮城県でも3．1で示した推定語史から「ナルカミ→カミナリ」と推移したものと考えられる。

さて、オナリであるが、国立国語研究所（1974a）の凡例において、ナルカミの一種に類別されている。したがって、オナリはナルカミが変化したものと考えられる。おそらく、「ナルカミ→ナリカミ→オナリカミ」と変化し、岩手県盛岡市に見られるようなオナリカミサン、あるいはカミ（サン）の部分を省略したオナリという語形を派生させたのではないだろうか。

ところで、ナルカミであるが、仙台藩（現在の岩手県南部から宮城県全域にかけての地域）では、近世前期の武士層が使用していたが、以降、姿を消してしまう。ただ、昭和初期の気仙沼市ではオナリと形を変えて使用されていた、と解釈しておきたい。

つぎにライサマ類であるが、漢語である「雷」を字音で読んだ「ライ」に敬称の「御（オ）」や「様（サマ）」をつけてできた語形である。おそらく、ライ類が原型であり、そこからライサマ類が生み出されたものと考えられる。その後、昭和中期になり、使用の主流がライサマ類へ移行していった。その結果が、先に見た国立国語研究所（1974a）の分布に反映されていると解釈することができる。また、平成期の高年層の言語を反映していると考えられる『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』（1992）にもライサマ類の記述が見られる。

(9) おれぁさま（雷）　　［『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』］

3．3　気仙沼市方言調査

3．3．1　調査結果の概観

ここからは、2005年度、および2006年度に行った調査から得られた結果を使用して、表に示した語形の使用状況について見ていくことにする。

まず、面接調査を行った2005年度調査結果を見ると、3人の高年層のうち、3人とも使用語形と回答したライサマ類と1人が使用語形と回答したゴロゴロサン類がある。2人の若年層では、2人とも使用語形と回答したのはライサマ類であり、理解語形と回答したのはゴロゴロサン類である。したがって、2005年度調査結果からは、ライサマ類は高年層と若年層の両世代で使用されていること、一方、ゴロゴロサン類であるが、高年層ではあまり使用されておらず、若年層になると理解語化している傾向が窺い知れる。

つぎに、多人数面接調査を行った2006年度の結果について、語形ごとに見ていくことにする。

まず、カンダチ類を見ると、各世代で使用語との回答は得られなかったが、中年層、および少年層ではそれぞれ1名ずつ理解語との回答が得られた。ただ、その数は少なく、既に廃語になってい

るようである。

ライについては、各世代において使用語、および理解語との回答が得られておらず、カンダチ類と同様に、既に廃語になっている。

オナリであるが、高年層で2人が理解語と回答しているが、それより下の世代では、使用語や理解語の回答は得られなかった。

ライサマ類については、使用語回答者が高年層や中年層に比較的多い。しかし、若年層や少年層では使用語回答者が理解語回答者を下回る。ただし、若年層と比べて少年層では理解語回答者が20人中6人と少ない。したがって、この語形は主に高年層、および中年層で使用されている語形であり、若年層や少年層では理解語化していることが窺える。

ゴロゴロサン類であるが、高年層において22人中11人と約半数が使用語形と回答している。しかし、中年層以下では使用語回答者がいるもののその数は少なく、さらに理解語回答者の数の少ない。そのため、高年層では使用語であるものの、それより下の世代では理解語化を経ずに、廃語へと向かっているのが調査結果から読み取れる。

最後に、共通語形のカミナリ類であるが、高年層や中年層では使用語形回答者は半数以下であるが、若年層と少年層では、ほぼ全員が使用語形と回答している。したがって、先に述べたゴロゴロサン類のように、理解語を経ずに「使用語→廃語」という方言語形の推移が窺える。これらに見られる傾向は、若い世代の共通語形使用が大きく関係しているものと思われる。

3. 3. 2　世代別、および男女別の観点から

ここでは、2006年度の多人数面接調査から得られた使用語・理解語の内訳を、世代別、および男女別という観点からに見ていく。そこで、表4として、回答語形を使用語と理解語に分け、世代別、および男女別の回答者数をそれぞれ分けたもの示す。なお、表の示し方は、2. 3. 2で述べているため、ここでは省略する。また、すべての語を取り上げることはせず、ライサマ類、ゴロゴロサン類の2語について見ていくことにする。

まず、ライサマ類であるが、高年層・中年層において使用者回答者の数が理解語回答者の数を大きく上回っている。一方、若年層・少年層では回答者数自体少ないが、理解語回答者の数が上回っている。したがって、中年層と若年層との間に使用語の境界線が存在していることになる。

つぎに、ゴロゴロサン類であるが、高年層、中年層男性、少年層女性で使用者回答者の数が理解語回答者の数を上回っている。高年層では回答者の半数が使用語としているが、中年層男性と若年年層女性では、理解語回答者の数が上回っているはいるが、回答者数自体少ない。一方、中年層女性では、回答者数自体少ないが、理解語回答者の数が上回っている。したがって、中年層女性では理解語化していると見てとれる。これらのことから、中年層の男性と女性との間に境界線が引けると見ることもできるが、使用語としての境界線は、高年層と中年層との間にあるものと考えられる。

表4　世代別・男女別に見た「雷」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		オカダチ類		ライサマ類		オナリ		ゴロゴロサン類		カミナリ類	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	0	0	**11**	0	0	**1**	**6**	2	**5**	0
22	女 10	0	0	**9**	0	0	**1**	**5**	2	**3**	1
中	男 7	0	0	**5**	2	0	0	**2**	1	**2**	0
15	女 8	0	**1**	**6**	2	0	0	1	**3**	**4**	0
若	男 5	0	0	1	**2**	0	0	0	0	**4**	0
13	女 8	0	0	1	**2**	0	0	**1**	**1**	**7**	0
少	男 10	0	**1**	1	**4**	0	0	0	**1**	**9**	0
20	女 10	0	0	0	**3**	0	0	**2**	1	**10**	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

(3) なお、「ライ」は回答者がいなかったため、表には示さなかった。

3. 4　まとめ

以上のことから、気仙沼市における「雷」を意味する語形についてまとめると、つぎのようになる。

・カンダチ類、ライ類・・・各世代で使用語、および理解語との回答がほとんど得られていないため、既に廃語になっているようである。

・オナリ・・・昭和初期には使用されていたが、平成期ではカンダチ類、ライ類と同様に、廃語になっていると考えられる。

・ライサマ類・・・昭和初期以降、平成の高年層、中年層で使用されているが、平成期の若年層・少年層では理解語化していることが窺える。

・ゴロゴロサン類・・・主に平成の高年層で使用されている語形である。若年層女性で理解語となっているが、それより下の世代では、理解語を経ずに廃語へと向かっている。その背景には、共通語形カミナリの使用が大きく関係しているものと思われる。

・カミナリ・・・高年層、および中年層男性では使用語回答者の数はさほど多くないが、中年層女性から下の世代にかけてはほとんどが使用語形と回答している。したがって、平成期の気仙沼市において、高年層と中年層男性ではライサマ類を、中年層女性より下の世代ではカミナリを、それぞれ使用しているといえそうである。

4. おわりに

以上、気仙沼市における「唾」、および「雷」を意味する語形について見てきた。伝統的方言は、高年層において使用語として存在しているのに対し、中年層以下では理解語とならずに廃語化しつつある、あるいは既に廃語になっている傾向が見られた。一方、共通語形は、高年層ではあまり使用されていないが、伝統的方言を使用しない世代である中年層以下では使用語となっている。したがって、気仙沼市における伝統的方言語彙は、共通語化により急速に失われている状況にあるといえそうである。その際、伝統的方言から共通語化への推移として、「伝統的方言語彙の使用語化→理解語化→廃語化（共通語化）」という変化でなく、「伝統的方言語彙の使用語化→共通語化」といった理解語化を経ずに直接共通語化へと移行していく傾向にあることも、今回の調査結果から窺い知ることができた。

最後に、本報告では2語しか取り上げなかった。この他にも、2006年度には「痰」、「夕立」、「糠」、「籾殻」を意味する語についても調査項目に立て、調査を行った。なお、これらの調査結果であるが、表5から表12として本報告の末尾に示しているので、そちらを参照されたい。

注1　当時、東北帝国大学（現在の東北大学）教授であった小林好日氏が東北地方の方言を対象に行った通信調査の調査票。調査は計3回行われ、本報告では、調査当時の気仙沼町（現在の気仙沼市）分の調査票のうち、第1回の2部、および第2回の4部を使用する。なお、同資料の調査概要については、竹田晃子（2002）が詳しく論じており、そちらを参照されたい。

注2　全国2400地点に及ぶ面接調査の結果を300枚の地図にまとめたものとして刊行されている。気仙沼市においては、1959年（昭和34年）、および1965年（昭和40年）にそれぞれ1名ずつ調査が行われている。

注3　スタンペについては、作田（2002）において、県中央部の仙台市、多賀城市、県南部の丸森町と白石市の例を示して述べている。

注4　佐藤武義ほか編（1999）を利用した。

【文献】

国立国語研究所（1968）『日本言語地図』第3巻　大蔵省印刷局

国立国語研究所（1974a）『日本言語地図』第6巻　大蔵省印刷局

国立国語研究所（1974b）『日本言語地図解説―各図の説明6―』大蔵省印刷局

小林　隆（1982）「3. 語彙」加藤正信・佐藤和之・小林隆編「宮城県北地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告』別巻第19集〈『東北文化研究室紀要』通巻第23集〉

作田将三郎（2002）「伝統的方言語彙」小林　隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

作田将三郎（2003）「宮城県における＜糠＞の地方語史」『言語科学論集』第7号

作田将三郎（2005）「宮城県における＜雷＞の地方語史」『国語学研究』第44集

作田将三郎（2006）「東北地方における＜雷＞の地方語史」『文化』第69集　第3・4号―秋・冬―
佐藤武義ほか編（1999）『近世方言辞典』第1輯　港の人
小学館国語辞典編集部編（1989）『日本方言大辞典』上巻・下巻　小学館
竹田晃子（2002）「小林好日氏による東北方言通信調査」『東北文化研究室紀要』通巻第44集

表5　気仙沼市の「痰」を意味する語形

年代	資料	被調査者	タンペ	タンコ	ネッペ類	タンパキ類	タン
2005	気仙沼市方言調査（面接調査）	平成期高年層	1/2	0/2	1/2（理 1）	1/2	2/2
		平成期若年層	1/2（理 1）	1/2（理 1）	0/2	0/2	2/2
2006	気仙沼市方言調査（多人数面接調査）	平成期高年層	6/22（理 6）	2/22（理 1）	3/22	8/22（理 4）	13/22
		平成期中年層	1/15（理 6）	0/15（理 1）	0/15（理 1）	0/15（理 4）	13/15
		平成期若年層	2/13（理 3）	0/13（理 3）	0/13	0/13（理 2）	12/13
		平成期少年層	3/20（理 10）	1/20（理 3）	3/20（理 3）	0/20	20/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「タンパキ、タンパギ、タンパゲ、タンパツ、タンパジ」はタンパキ類に、それぞれ含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。
数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、（理　）＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

(3) なお、タンパキ類の語形回答者数は、各類の語形のうち、どれか1語でも回答した人数である。

表6　世代別・男女別に見た「痰」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		タンペ		タンコ		ネッペ		タンパキ		タン	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	**4**	**4**	0	0	**3**	0	**5**	1	**7**	0
22	女 10	**2**	**2**	**2**	**1**	0	0	**3**	**3**	**6**	0
中	男 7	1	**3**	0	0	0	0	0	**2**	**5**	0
15	女 8	0	**3**	0	**1**	0	**1**	0	**2**	**8**	0
若	男 5	**1**	**1**	0	**2**	0	0	0	**1**	**4**	0
13	女 8	0	**2**	0	**1**	0	0	0	**1**	**8**	0
少	男 10	1	**5**	0	**1**	0	**1**	0	0	**10**	0
20	女 10	2	**5**	0	**1**	0	**2**	0	0	**10**	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。
高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数
使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表7　気仙沼市の「夕立」を意味する語形

年代	資料	被調査者	オカダチアメ	オレサマアメ類	ユーダチ	ニワカアメ	カミナリアメ
1959～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	2/2	0/2	0/2	0/2
2005	気仙沼市方言調査（面接調査）	平成期高年層	0/2	2/2	0/1	0/1	1/2
		平成期若年層	0/2	0/2	1/2	0/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査（多人数面接調査）	平成期高年層	0/22	19/22（理 2）	14/22	4/22	0/22
		平成期中年層	0/15	7/15（理 4）	9/15	1/15	2/15
		平成期若年層	0/13	0/13（理 3）	12/13	0/13	0/15
		平成期少年層	0/20	0/20（理 2）	16/20	7/20	0/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「オレサマアメ、オレーサマアメ、オデサマアメ」はオレサマアメ類に含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。
数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、（理　）＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

(3) なお、オレサマアメ類は、オレサマアメ類の語形のうち、どれか１語でも回答した人数である。

表8　世代別・男女別に見た「夕立」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		オカダチアメ類		オレサマアメ類		ユーダチ		ニワカアメ		カミナリアメ	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	0	0	**11**	1	**7**	0	**2**	0	0	0
22	女 10	0	0	**8**	1	**7**	0	**2**	0	0	0
中	男 7	0	0	**3**	2	**5**	0	**1**	0	**1**	0
15	女 8	0	0	**4**	2	**4**	0	0	0	**1**	0
若	男 5	0	0	0	**1**	**5**	0	0	0	0	0
13	女 8	0	0	0	**2**	**7**	0	0	0	0	0
少	男 10	0	0	0	**1**	**6**	0	**1**	0	0	0
20	女 10	0	0	0	**1**	**10**	0	**6**	0	0	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。
高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数
使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表9　気仙沼市の「糠」を意味する語形

年代	資料	被調査者	コヌカ	サクズ	ヌカ	コメヌカ
1949	本吉郡誌			○		
1953	気仙沼町誌			○		
1959	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	2/2	0/2	0/2
～65						
2005	気仙沼市方言調査	平成期高年層	0/2	2/2	2/2	1/2
	（面接調査）	平成期若年層	0/2	1/2	2/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査	平成期高年層	2/22	15/22	15/22	0/22
	（多人数面接調査）		(理 6)	(理 5)		
		平成期中年層	0/15	6/15	9/15	3/15
			(理 2)	(理 6)		
		平成期若年層	1/13	0/13	13/13	2/13
				(理 4)		
		平成期少年層	2/20	2/20	11/20	3/20
				(理 2)		

【表の見方】

(1) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、（理　）＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

表10　世代別・男女別に見た「糠」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		コヌカ		サクズ		ヌカ		コメヌカ	
		使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	1	**5**	**9**	2	**7**	0	0	0
22	女 10	**1**	**1**	**6**	3	**8**	0	0	0
中	男 7	0	0	2	**4**	**4**	0	**3**	0
15	女 8	0	**2**	**4**	2	**5**	0	0	0
若	男 5	0	0	0	**2**	**5**	0	0	0
13	女 8	**1**	0	0	**2**	**8**	0	**2**	0
少	男 10	**2**	0	**1**	0	**4**	0	**1**	0
20	女 10	0	0	**1**	0	**7**	0	**2**	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表11　気仙沼市の「籾殻」を意味する語形

年代	資料	被調査者	ヌカ	モミガラ	モミ
1959	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	1/2	0/2
～65					
2005	気仙沼市方言調査	平成期高年層	2/2	2/2	0/2
	（面接調査）	平成期若年層	2/2	2/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査	平成期高年層	8/22	15/22	4/22
	（多人数面接調査）	平成期中年層	3/15	11/15	5/15
			(理 1)		
		平成期若年層	2/13	7/13	6/13
			(理 1)		
		平成期少年層	5/20	9/20	11/20
			(理 5)		

【表の見方】

(1) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理　)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

表12　世代別・男女別に見た「籾殻」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		ヌカ		モミガラ		モミ	
		使	理	使	理	使	理
高	男 12	**6**	0	**5**	0	**1**	0
22	女 10	**2**	0	**9**	0	**3**	0
中	男 7	**1**	0	**5**	0	**3**	0
15	女 8	**2**	1	**5**	0	**2**	0
若	男 5	0	0	**3**	0	**3**	0
13	女 8	**2**	1	**4**	0	**3**	0
少	男 10	**2**	1	**4**	0	0	0
20	女 10	3	**4**	**5**	0	**2**	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。